

三島由紀夫「百万円煎餅」論

—コピー化していく世界—

はじめに

堅実で生真面目な生活を信条としながらも、実は自らの性を売っている若い夫婦の二面性を描いた短篇小説「百万円煎餅」(『新潮』昭和三十五年九月)は、三島由紀夫が「お座敷でエロ・ショーを見せるのが商売の若夫婦が、その実今時めづらしい堅実な市井的な生活意識を持つてゐるといふ皮肉を利かせた短編である」と自解するようにストーリーの展開そのものをたのしむ「コント」形式の小説である。三島の短編小説は「知的操作のみにたよるコント型式への嗜好」を一傾向として持つており、「百万円煎餅」はまさにその嗜好に合ったものといえるだろう。突如明かされるこの夫婦の二面性の、実態と表層の落差が激しければ激しいほど、コント形式を支える構造として機能する。

しかし、それは、どのように物語が展開するかという点に限った場合での理解でしかない。というのも、小説内の彼らがなぜそのような落差を生きているのかということは、オチという結末には回収しきれない不条理さを内包しているからである。そこには「コント」という小説形式の問題では解決することのできないものがあるのではないだ

ろうか。それは「百万円煎餅」では、テクストの結末に描かれた引き破ることのできない「湿った煎餅」として不可解な存在を残している。

さらにこの小説に違和感をもたらしているのは、「現代日本に希望がないなどといふ青年の考え方ほど、健造を腹立たしくさせる考へはなかつた」という記述である。これは、語り手による健造の心情の説明である。このテクストは語り手によって、健造と清子の内面に立ち入り解説がほどこされていく。語り手はこの時代の多数派の若者たち、つまり「現代日本に希望がないなどといふ青年」たちとは異なる青年像として健造を定位させる。そしてこの語りはテクストを取り巻く外部の状況へと読み手の視線をいざなう。なぜならば、「百万円煎餅」の中には、健造を差異化させるような「現代日本に希望がないなどといふ青年」は登場しないからである。

「百万円煎餅」が発表された昭和三十五年は、(政治の季節)として日本の戦後史に刻印された時代である。六〇年の安保闘争の国民的な広がりや急速な失速という同時代状況と「百万円煎餅」は無縁ではない。この小説が掲載された『新潮』昭和三十五年九月号の巻頭には福田恆存の「常識に還れ」という評論が掲げられている。福田は保守系論客として、同年六月十五日の安保闘争における社会党や世論の論

中 元 さおり

調に対して虚偽を告発する論を展開している。その他、「文学者の政治的参加」というテーマで石川淳、吉田健一、小島信夫がそれぞれの意見を論じているが、三氏は共通して文学が政治に深く関係していく可能性について懐疑的な立場を表明している。安保闘争をめぐる言説がさまざまな立場から入り乱れていた当時のジャーナリズムにおいて、『新潮』は些か冷めたスタンスをとりながらも、文学、文学者という視点から安保闘争をめぐる言説を生産し、この言説空間の加担者たらんとする動きをみせていたといえる。

三島も例に洩れず、同時代の作家として六〇年安保の高揚した空気のなかにあった。六月十八日から十九日にかけて、新安保条約の自然承認される前後の国会や首相官邸前の動きを、記者クラブのバルコニーから見学している。この時の三島は、後に七〇年安保に積極的に関わっていくのに比べれば、反安保運動の大衆的な高揚と退潮の様相を見てはいながらも、いわゆる「ヤジ馬」的立場に身を置いており、安保をめぐる状況からある程度の距離を置いていた。しかし、安保闘争見学の一週間後にあたる六月二十六日に起筆された「百万円煎餅」は、まさに同時代の状況を横目に見ながら書かれたものだといえるだろう。「現代日本に希望がないなどといふ青年の考へ方ほど、健造を腹立たしくさせる考へはなかつた」という一文は、まさに「百万円煎餅」を取り巻く言説空間の存在を意識させる。語り手はこのように語ることで、「現代日本に希望がない」と主張している青年たちとは異なる若者として健造を定位するとともに、「百万円煎餅」を取り巻く外部の状況——掲載号の『新潮』がテーマに据えていた六〇年安保をめぐる事態——へと読み手の視線を一端誘導する。なぜならば、テキスト

のなかには健造を差異化させるような「現代日本に希望がないなどといふ青年」は登場しないからである。

しかし、「百万円煎餅」はこのような同時代言説のなかにあつて、あまりに異質な物語空間を形成しているようにみえる。浅草の人工的でキツチュな空間を浮遊する若い男女の姿は、「政治の季節」としての同時代性を一切共有していない。「現代日本に希望がないなどといふ青年」から健造を差異化している語り手の言葉は、テキストを取り巻く状況へと関心を向けながらも、テキストの外部に広がる六〇年安保をめぐる言説に対して冷めた視線を投げかけたものとしてうつる。安保闘争に参加する若者たちとの差異について言及しながらも、それを批判するのではなく、そのような若者たちと「百万円煎餅」の健造・清子が乖離した存在であるという差異そのものを明確に規定しようとするものである。つまり、この一文によって「政治の季節」としての同時代の状況はあっさりその後景に追いやられていくのだ。六〇年の安保闘争という時代状況を意識下に置きながらも、そこに存在している若者とこのテキストに登場する若者の間に明確な境界線を引くことで、安保をめぐる同時代の言説空間とは別の位相に「百万円煎餅」はある。

それでは「百万円煎餅」が立脚するのはどのような位相なのだろうか。まがい物めいた人工的な空間を彷徨うなかで「もつとたのしい生活の夢」を欲望する若い夫婦の生の有り様を検討し、このテキストにおける時代の様相について言及していきたい。

「百万円煎餅」の健造と清子にみられる堅実で質実な生活人の姿と、セックスワーカーとしての姿の落差は、テクスト内部の論理からみれば、彼らの（よりよい生活への志向）からもたらされたものであり、その際立つ落差がコント形式としての構造を支える装置であった。しかし、最後に健造が手にする甘く粘つく煎餅の「強靱な抵抗」は不可解なまま取り残されていく。この柔らかくねって健造に抵抗する煎餅の存在は、大衆消費化していく社会をめぐる状況から眺め返すことで説明が可能となるのではないだろうか。それは、彼らの二面性を引き起こしている（よりよい生活への志向）こそが、大衆消費社会化していく六〇年代をまさに表象するものであるからである。

彼らの暮らしは堅実で計画的に進められていく。貯蓄はX計画、Y計画、Z計画と目的別に細分化され、慎重に検討を加えながら買物をする。しかし、彼らの堅実性は（よりよい生活）を手に入れるための手段であり、そこに消費者としての姿が透けてみえる。つまり彼らは質素な生活を好む人間ではなく、当時メディアで広く喧伝されていた合理的な電化生活を夢み、電気洗濯機やテレビ、電気冷蔵庫を欲望し確実に手に入れていく、些か慎重な消費者なのだ。

消費活動の活発化、大衆化の動きは健造・清子夫婦の暮らしぶりにも指摘できる。彼らは計画的な貯蓄の結果、電気洗濯機とテレビを手に入れている。昭和三十五年の大卒男性の初任給は平均一万六千円程度だったなかで、電気洗濯機は二万四千八百円（日立製作所の主力機種「標準価格」）、テレビは五万八千円（松下電器産業主力機種「標準価格」）だった。彼らの暮らしぶりは決して裕福ではないものの、極めて

中流的な生活を送っているといえる。

また、「国民生活白書（昭和三十五年版）」（経済企画庁編）によれば、貯蓄額の増加は生活設計の意識の高まりへと繋がったことが言及されている。それは、（よりよい生活への志向）に基づくライフプランの構築の頭在化を意味するだろう。とはいえ、月給の何倍もする電化製品を手に入れるためには、如何にしてお金を得るかということが大きな課題となる。「とくに若い主婦にとっては、お金は「出るを制する」よりは「出るものは出る」、だから「働いてつくる」もの」といったような思考の変化がみられ、お金を生み出すための「積極的な方法」が求められていたことは、加納実紀代が指摘しているところである。加納の調査によると、その「積極的な方法」として内職や株などによる利殖、夫婦共働きを推奨するような記事が『主婦の友』に目立ち始めていることがわかる。内職の記事は、戦前から女性誌に多く掲載されているが、昭和二十八年には「美しい趣味の手芸内職に成功した体験」（二月号）、「内職にもなる趣味のナイロン手芸」（七月号）などがみられ、「美しい」「趣味」を強調して内職にともなう暗いイメージを払拭しようとしている。記事が目につくようになってくる。また、利殖については、『主婦の友』では昭和三十年から利殖をテーマにした「利殖の秘訣ソツとお知らせ」という連載記事が始まっている。

もちろん、内職や株による利殖と、性風俗を職業にすることの間には大きな距離が存在するが、「百万円煎餅」の若い夫婦が、セックスワーカーであることの理由の一つとして、お金を得るための「積極的な方法」が求められた当時の状況をみるることができるだろう。「子供

は絶対に計画的に作るべきで、X計画の貯金額が達成されるまでは、どんなにほしくても我慢しなければならなかった」という健造と清子の考えもまた、同時代の意識を共有したものである。「建築資金はまだ二人の計画のどこにも顔を出していなかったが、いずれは顔を出すべきものだった。未来には、今は夢としか思はれないどんなものも、そのときにはごく自然な表情で現れて来るだらう」という語り手の言葉によって、彼らの生活設計への意識がすでに充分に内面化されたものであることが明かされている。

二

健造と清子は仕事を斡旋してもらうため、「をばさん」と浅草の「新世界」という娯楽施設で待ち合わせをしている。「新世界」の人工的な空間を約束の時間まで彷徨するのだが、そこでキツチュな世界に戯れる彼らの身振りは興味深い。「すばらしい安物のぴかぴかした商品」が大量に陳列されている「東京タワーの模型」が飾りつけられた売場や、ジュール・ヴェルヌの作品世界を模した「海底二万哩」などの見世物（アトラクション）を遊歩しながら、彼らは生活に対する「理想的な計画」を語り合うのだ。それは過剰なまでに周到な生活設計——電機洗濯機やテレビ、電機冷蔵庫といった耐久消費財を購入するための綿密な貯蓄計画や、子供の出生を周到にコントロールしようとする家族計画への高い意識を持ち合わせた小市民的な側面を明らかにしている。

健造のお気に入りの場所として描かれる玩具売場には、ブリキで

きた宇宙基地やロケット、汽車などがひしめき合う。大量のコピー商品で遊ぶうちに、若い夫婦はいつか子供を持ちたいという理想を語り合うが、そのような「生活の夢」への欲望は、「子供は理想的な育児の環境に、計画出産によつて生み出されるべきもの」という規制のもとに厳しく制御されている。それは家庭の経済バランスに見合わない出産に対する彼らの蔑みの視線として表れている。このようなより良い生活を獲得するための家族計画に対する規範意識は、出産をめぐる同時代の状況を背景化したものである。戦中に流布した「産めよ増やせよ」や「欲しがりません、勝つまでは」といったスローガンから一転し、戦後は国家的な政策として、昭和二十年代後半から受胎調節の普及がなされてきた。その際には効果的な教材の一つとして多産な家庭の困窮を表す図説を用いることで、子供の数が多すぎると家庭の不幸に繋がるというイメージを抱かせる方法がとられていたのである。

また、彼らが足を踏み入れるマジック・ランドという見世物もまた、「悪趣味」な人工的な空間であるが、赤や緑の電飾が点滅し毒々しい人工の花に囲まれた家は、大衆の夢であるマイホームを模倣したものであるだろう。現にマジック・ランドを訪れた健造は「いつか家を建てたら、玄関までの道をこんな風にしようや」と語り、「自分の持家へ入つてゆく気持といふものはどんなだらう」と、見世物としてコピーされた家に触発され、自分の「生活の夢」を欲望していくこととなる。生活の理想を重ね合わせながらも、見世物であるこのマイホームの「傾斜した部屋」という空間のいびつさに、一度は「こんな家には住みたいくないね」と感想をもらす。しかし、清子は自らの身体を傾斜させることで部屋に適応し「かうやつて暮したら、住めないことな

いわね」と、健造が語ったより良い生活への欲望を補強していくのだ。

要するに、大衆の理想的な生活を模倣した「新世界」のコピー的な空間は、俗悪なキッチュさを帯ながらも、そこに表象されるような生活すらも模倣したいという欲望をかりたてる装置として機能しているといえるだろう。彼らは、人工的な模倣空間に戯れ、そのようなコピー化された世界を手に入れようとする消費者なのである。そして、彼らが欲望する理想的な生活というヴィジョン自体も、そもそもはメディアなどで流布している「生活の夢」を模倣した、コピー化された夢なのだ。

では、このようなコピーを欲望する消費者としての健造と清子の主体とは、いかなるものなのだろうか。コピー的な空間を遊歩する彼らの内面は、オリジナルな固有性を持ち得るのだろうか。それは、「海底二万哩」という見世物で遊ぶ場面において表れているように思われる。海底の光景を映しとった空間をトロツコに乗って巡っていく彼らは、怖がる女と余裕をみせる男という客としての定型を意識的に模倣しているのである。清子は「少しも怖がらない顔つき」で「怖いわ」と健造にしがみつく。また「早くすまないかなあ。私もう怖くていや」と不安な身振りをとりながらも、周遊が終われば「これで四十円なんてばかにしてるわね」と、見世物が四十円という価値に見合わないことを冷静に判断している。

健造はしがみつく清子の頬に頬をつけ、肩にまはした手の指先はおもしろさうに髪の毛を繕うてゐた。その指先の動きは車の速度に比べていかにもゆるやかで、清子は良人がこの見世物ばかりか、見世物を怖がる彼女をもゆつくりと楽しんでゐるのを知った。

一方の健造もまた、余裕のある良人としての身振りを保持しながら、類型的な客の態度をコピーしている妻の様子までをも楽しもうとするのだ。このように彼らは徹底的なまでにこの見世物を見世物として消費しようとする。それは、彼らが「四十円出せば、鱈でも鯛でも、一等等いいお魚が百グラム買へるんだのに」といった価値基準をもっていることに起因していよう。「一等等いいお魚」に十分見合うだけのものとしてこの見世物を消費しようとしているのである。また、その消費のスタイルにおいては、類型的な客の態度を模倣するという方法しか彼らにはない。コピーの世界に戯れる彼らの内面もまた、既存のもののコピーでしかないという実体があらわになる。健造と清子が語り合う「生活の夢」自体もまた、大衆消費社会における一般的な消費者の理想を踏み越えるものではなく、彼らの存在自体が模倣的な模相を呈してくるのだ。そして、コピーによつて埋め尽くされた「新世界」は、どこかまがいものめいたキッチュな空間として立ち現れてくる。どこまでいっても舞台の書き割りめいた世界が続き、現実感希薄になっていく。それは、「新世界」を浮遊する健造と清子の存在にも同様に波及していくのである。

三

健造と清子の夫婦関係については、性役割が明確に振り分けられたかたちで語られている点も気になる。「清子の小さな目は澄んでゐて、良人以外の男には、ほんの一瞬でも向けられることがなかつた」「車道を横切るときなど、彼は妻の二の腕をきつく握り、左右の車のゆき

きに目を配りながら、自分の手がたしかめる妻の肉のふくよかさを、誇らしげに向う岸へ運んで行つた」という語りからは、主導権を握る夫と従順な妻という、ある種ステレオタイプな夫婦像が描きだされている。さらに彼らの夫婦愛は、「まず自然を崇拜すべきであり、夫婦の睦み合いはその基本であり、一組の男女が信頼し合つて生きることこそ、世界の絶望を阻むもつとも大きな力でなければならぬ」という「宗教的信条」に支えられたものであることに語り手は言及する。夫婦の肉体的な繋がりが自然の崇拜という「宗教的信条」へと接続されていくこの語りは、夫婦の性的生活の質を向上させることが、家庭の円満とひいては国家の安定にとつて重要な事柄であるという戦前からの言説を受け継ぐとともに、戦後において避妊法が広く周知されていくなかで、「避妊は人間にとつての新しい「自然の姿」、人類の叡智」と称されるようになり、避妊をともなつた（そして男女がどちらも快樂を味わうことのできる）セックスこそが正しい性のあり方という規範が浸透していった」と荻野が指摘するような状況を背景にしている。

夫婦の肉体的な繋がりが国家や、「自然の姿」「人類の叡智」といったものへと関係づけられて語られることは、「百万円煎餅」と書かれた時期が近い三島の短篇小説「憂国」（『小説中央公論』昭和三十六年一月、執筆は昭和三十五年十月十六年）に繋がるモチーフでもある。「憂国」に登場する新婚夫婦の生活は「すべて道徳的であり、「教育勸語」の「夫婦相和シ」の訓へにも叶つてゐた」もので、典型的な美男美女のカップルとして描かれる。「憂国」の夫婦の結びつきその後には、国家がひかえており、彼らの生活はすべて「神威」に守られ

たものである。「憂国」と「百万円煎餅」の作品内の時代設定の違いはあるが、両作品においてそれぞれの若い夫婦の関係が「宗教的信条」に基づいたものとして語られていることは、非常に興味深い。この時期に似たような設定を時代を変えて描いたのには、「百万円煎餅」発表の前年にあつた皇太子の成婚（昭和三十四年四月）が影響しているのではないだろうか。

大衆化された戦後社会において皇太子夫妻の姿が幾度となくメディアに登場し、「幸福な家庭」のモデルとしての意味合いを濃くしていくなかで「百万円煎餅」の若い夫婦の抱く夢もまた、皇太子夫婦の家庭生活のイメージを追うものである。「百万円煎餅」発表の同年二月には親王も生まれ、皇太子夫婦の子育ての様子は女性週刊誌に多くとりあげられた。皇室の伝統的な慣習からは距離をおき、皇太子妃が自らの手で育児や家庭を担おうとする姿は、広く大衆の関心を集めた。このような時期に「百万円煎餅」に描かれた理想の結婚生活を追い求める夫婦の姿は、まさに同時代における結婚生活と家庭の問題を背景としている。

また、「百万円煎餅」の健造と清子の生活設計への関心の高さは、出産計画において顕著にあらわれている。

しかし子供となると違ふ。すつかり生活のメドが立ち、十分な上にも十分な貯えが出来、生れた子供が一人前になるまでとは行かなくても、子供のために親が世間に恥じないだけの環境を調べてやる用意が要る。乳幼児の粉ミルク代がどれだけ莫迦にならないかを、健造はすでに子持ちの友達からきいてよく研究してゐた。かういふ理想的な計画を心に抱いていたので、夫婦は貧しい人た

ちの、行き当りばつたりな生活態度を蔑んでゐた。子供は理想的な育児の環境に、計画出産によつて生みだされるべきものであるし、子供が出来たらその先には、もつとたのしい生活の夢が待つてゐた。しかし二人の夢は、あんまり遠くを追はないことにかつても堅実だつた。そしていつも目の前に光りを見てゐた。

家族計画に対する健造と清子の意識の高さは、出産をめぐる当時の言説と相似形をなす。家族計画という概念は、まさに戦後的なものである。一戸建てに住む夫婦と子供二人という家族モデルが形成され、広く共有されるのは、大衆消費化社会の成立の基本的な要件である。出生率の低下は家族計画という意識が普及することによつてもたらされた。『厚生白書（昭和三十三年版）』では家族計画についての説明が行なわれ、国の政策として積極的に進めようとする次のような言説をみることが出来る。

われわれが健康にして文化的な生活を営むためには、自らの手で家族設計すなわち適当な家族構成を考えて行くことが必要となるが、家族計画とは、このような自主的計画的な家族設計のことをいうのである。したがつてそれは単に子供の数を減らすということではなく、現在と将来を考え、適当な時期に適当な数の子供を生む自主的な計画をいうのであるが、このような家族計画を実施するための手段が受胎調節なのである。

戦後のベビーブームを経て国家の政策として受胎調節の普及がなされていった。既婚女性に対して、受胎調節実地指導員による実施指導が昭和二十年代後半から地道に行なわれていたが、それは「避妊や計画出産を実行することがいかに自分や家族にとつて利益や幸福をもたら

らすかを、とりわけ妊娠・出産の当事者である女たち自身に納得させ、自ら進んで受胎調節に取り組む気持ちにさせることが、指導の成功への秘訣と考えられた¹⁰」ためであると荻野美穂は指摘する。このような草の根活動的な指導のほか、女性誌においても家族計画の理念の普及を目指した記事や具体的な避妊法についての記事、あるいは避妊具の広告が頻りに掲載されており、性と出産をめぐる問題に人々の関心が高まっていたことがわかる¹¹。また、これまで主流であつた随胎による産児調整を、母体保護を目的とした避妊による受胎調節への移行を国が推し進めた時期でもあつた。

このような同時代的な言説空間のなかに「百万円煎餅」はある。健造・清子夫婦の計画出産への高い意識は、家族計画をめぐる言説を反復する形で語り手によつて語られているのだ。

出産の抑制は計画的な妊娠の遂行だけでなく、随胎による抑制も含まれる。昭和三十（五五）年の人工妊娠中絶数は一一七万件に達している。（ちなみに九五年は三四万件）このような事態の背景には、二十三（四八）年の優性保護法の成立や、二十九（五四）年の日本家族計画連盟の発足といった流れがある。それは、子供は授かりものであるという意識から、計画的に作るものであるという、出産をめぐる意識の大きな転換をうながすものだつた。

子育てによる経済的負担を回避するために、当時の随胎は結婚している夫婦によるものが多かつたとされる。このような状況について山田昌弘は「子育てしながら家族が経済的に豊かになる基盤が形成された」と解説するが、それはまさに大衆消費化社会の到来を裏付けるものである。つまり、（よりよい生活への志向）が人生における第一の

優先事項となつてゐることを意味してしよう。いかに消費し生活を向上させるかが重要な命題として人々に浸透していく時代であり、「百万円煎餅」の健造と清子に対する堅実な夫婦という表象も、このような言説によつて意味付けられていくのだ。

四

「百万円煎餅」には、健造と清子が戯れるコピートの世界である「新世界」の他に、もう一つ別の空間が描かれている。それは、彼らが「新世界」の屋上から「ほとんど神秘的な美しさで眺めやる」広い料理屋の空間である。地理的にこの料理屋はもちろん浅草に位置するのだが、そこを客として訪れるのは浅草に息づく健造らとは異なつた階層の間である。

「あんなとこ高価いんでせうねえ」

「そりやあ高いさ、馬鹿の行く処さ」

「もろきうなんて洒落れたこと言つて、胡瓜なんか、ずいぶん高く売るんだらうな。いくらぐらゐあ？」

「さあ、二百円ぐらゐかな」

健造は清子の手からスポーツ・シャツを受けとつて腕をとほした。清子は手をのばしてそのボタンを一つ一つはめてやりながら、つづけた。

「ばかにしてるわ、十倍ぢやないの。今、最上品だつて、三本二十円で売つてるわよ」

「へえ、安くなつたんだな」

「一週間ぐらゐ前から下つて来たんだわね」

このように、彼らは自分たちの生活を基準とした貨幣価値によつて、世界を認識していく。そして、そのような方法で彼らは自分たちの世界とは異なる価値基準をもつ世界を発見するのである。この料亭という空間は、「新世界」に隣接しながらも山の手の住人によつて満たされた異質の空間であり、そこは浅草ではなく山の手へと接続していく場である。健造と清子が「新世界」の屋上からこのような空間を発見したことを契機に、「百万円煎餅」はそれまでのコピートとの親和性の物語から、ブルジョワジー（山の手）／プロレタリアート（浅草）の拮抗の物語へと変容していくことは見逃せない。

この二項対立的な図式は、健造と清子が「をばさん」の斡旋によつて山の手の奥さん連の集まりに呼ばれていくことでより一層明瞭なものとなる。セックススワーカーである彼らの性に五千円という破格の対価が払われたことは、彼らの存在と料亭に行く階層の妻たちの存在の差異の大きさを表しているのだ。健造と清子のセックスショーは、ショーであるがゆえに、山の手の女たちにとっては余興としての性、レクリエーションとしての性として受け取られていく。そしてここに、自らを商品として提供する側と、それをただ楽しみ消費する側という対立関係が浮かび上がるのである。さらには、彼らの雇い主である「をばさん」との関係もまた、金銭の問題が語られることにより、対立的なものであることがわかる。

山の手の女たちの性への関心の源には、当時の性の解放をめぐる状況が背景化されている。特に、昭和三十五年六月に出版された産婦人科医謝国権による『性生活の知恵』（池田書店）はまたたくまに大き

な反響を読んだ。『性生活の知恵』は、人形をつかった体位解説が話題となり、性生活の指導書として女性読者を多く獲得した。また、女性誌においてもセックス相談のコーナーが設けられるなど、性をめぐる言説が俄に活発化している。このような同時代的なコンテクストにおいて、「百万円煎餅」の山の手の女たちのリアリティーは補強されるのである。

「百万円煎餅」に描き出されたブルジョワジー／プロレタリアートという階級闘争的な二項対立の様相は、仕事を終えたあとの健造の言葉によって描きだされる。健造は山の手の女たちを「いやなお客」「気障なお客」と悪態をつき、破格の待遇である五千円というお金に対しても「こいつをビリビリ破いてやつたら、胸がスツとするんだが」と釈然としない。しかし、健造が表明するブルジョワジーへの批判は、いかにも紋切り型なものであり、打倒すべき階級差としてまで意識されることはない。両者の間に大きな差異は存在しながらも、健造たちにとつて山の手の人間は打倒すべき闘争の相手ではなく、また単純に理想とされる対象でもないのだ。

健造と清子は、浅草の世界で戯れた幸せな生活をコピーしたキツチュな世界の消費者であることを望んでいる一方で、現実の世界を象徴する山の手の女たちの前では、自分たちこそが彼女らの余興のために消費される立場であるという矛盾が浮きぼりとなるのである。健造たちの理想は、浅草の「新世界」で体験したような、コピーと戯れる消費者であることで、その理想像は「新世界」の人工的な五重塔に象徴されている。彼らが求めているのは、山の手の女たちのような中流階級の生活ではなく、「新世界」のなかにあるコピーだらけの造り物の

世界である。貧しい健造と清子にとつて、幸福な家庭とは具体的かつ現実的な暮しではなく、豊かさを記号的にちりばめた人工的なものしか想像されることはない。そのため、現実の金銭として五千円を手にし、一時的であれ彼らの懐が潤ったとしても、人工的でキツチュな「新世界」で夢みた理想の生活への切符である百万円煎餅を健造は引き破ることができないのではないだろうか。

掌に余る大きな百万円煎餅を、彼は両手で引き破らうと身構へた。手に煎餅の甘い肌が粘ついた。買つてからずいぶん時が経つたので、すっかり湿つた煎餅は、引き破らうとするそばから柔かくくねつて、くねればくねるほど強靱な抵抗が加はり、健造はどうにもそれを引き破ることができなかった。

ここで健造の手にねばつく抵抗する百万円煎餅は、彼らが理想とする生活をかなえるものの象徴であるとともに、現実の五千円という金銭の象徴でもある。現実の五千円を引き破るという行為を、百万円煎餅で代償しようとするのだが、強靱な抵抗力をまゑに健造は無力である。この場面には、人工的なもので埋め尽くされたキツチュで小市民的な健造と清子の夢の生活が、現実の力によつて未だ大きく阻まれているという皮肉な事態が語られている。

ところで、健造と清子の性は、第一義に「自然を崇拜すべき」という彼らの「宗教的信条」の基本としての意味をもっている。しかし、それは夫婦の睦み合いという意味においてのみ有効なコードである。彼らのもう一つの性は、その夫婦の性の形態をコピーすることで、商品としての性、他者に消費される性として位置付けられるものである。この商品としての性は、何度もコピーを反復することによつて、彼ら

にとつての性の本来の意味を失っていくという、ボードリヤールの視点を共有するものである。コピーの再生産により、「自然を崇拜すべき」という「宗教的信条」というオリジナルな意味は消滅し、彼らはセックスを単なるショーとして売ることができるようだ。彼らはこのような手続きを経ることで、夫婦としての性を商品化していく。この夫婦は、「新世界」の人工的な五重塔に表象されるような大衆消費化した生活を獲得するための手取り早い方法として、自らの性を消費される商品としての性へと、パッケージングしているのである。

おわりに

ブルジョワジー／プロレタリアートの二項対立的構造において、下部構造に位置づけられている健造らが、階級闘争に目を向けるのではなく、自らもコピーとして消費されるとともに、コピーの氾濫によって成立する大衆消費的生活を欲望していくという消費活動の方へ目を向けていることは、もはや、マルクス主義的な二項対立が無効となり、大衆消費社会化へと大きく変貌していく日本の戦後社会の転回点の様相を捉えたものとして指摘できよう。

コピーと戯れていた自分たちが、コピーとして商品化（記号化）され消費されていく健造と清子の存在は、コピーと戯れ消費する人間の主体性そのものの揺らぎを物語っているのではないだろうか。コピーからコピーへと絶え間の無い反復運動そのものが、大衆の欲望としてあるだけでなく、欲望の主体すらも固有性を確保しえず、コピー化していく世界に溶解していくかのような漠然たる不安感に満ちたデクス

トとして意味付けられる。

また、彼らが追い求める「誰の手も届かない飛切りの生活の夢」は、「新世界」の屋上にあるけばけばしい五重塔のなかに「純潔に」しまわれている。理想としての存在が、人工的かつ小さな五重塔にしまわれているという設定は、三島の小説「金閣寺」（『新潮』昭和三十一年一―十月）における金閣の存在を想起させる。美の象徴として金閣が主人公に絶対的な力を及ぼすように「百万円煎餅」のけばけばしい五重塔も、彼らの理想をあらわすものとしてシンボリックに描かれている。また、「金閣寺」では、現実の金閣よりも模造の金閣の方が美しいものとして主人公に捉えられているように、「百万円煎餅」でも人工的で小さな五重塔のなかに理想的な生活がしまいかまれているように、健造と清子には感じられるのである。このような論理において、「百万円煎餅」では、現実的なものよりも、コピーされた人工的なものにこそ理想を求めるといふキツチユな世界が展開されているのである。

俗悪な模造品としての五重塔のなかに「純潔に」しまわれた理想像とは、大衆消費社会における理想的な家庭像のオリジナルであり、大衆によって模倣されていく皇太子一家の姿に重ねてみたくなる。さらに、健造と清子に理想として眺められる「新世界」の五重塔という存在そのものの人工性は、彼らの存在が主体的なものではなく、コピー的なものとしてしか存在しえないことを物語るものではないだろうか。

注(一) 三島由紀夫『『百万円煎餅』の背景―淺草新世界』（『東京新聞』夕

刊」、昭和三十七年四月十五日)

(2) 三島由紀夫「解説」(新潮文庫『花ざかりの森・憂国』、昭和四十三年九月)

(3) 『新潮』昭和三十五年九月号に掲載された六〇年安保をめぐる評論には、石川淳「政治についての架空演説」、吉田健一「象牙の塔を出て」、小島信夫「第三の新人はどうなる」がある。石川は、今日では政治と芸術は切り離すことはできないが、この混乱の時期において両者の関係性の見通しをつけることは困難であると述べている。また、吉田論では政治に関与するならば、文士としての自己を捨てなければならず、文学と政治が容易く関係をとり結ぶことはないとしている。小島は、このような時代状況の只中から新たな作家が登場するかもしれないが、第三の新人と呼ばれる作家たちは政治と一定の距離をとった上で、これまで通り自己の身近なものを作品の題材としていくであろうと予言している。

(4) 三島由紀夫「一つの政治的意見」(『毎日新聞』昭和三十五年六月二十五日)

(5) 三島由紀夫「『百万円煎餅』の背景―浅草新世界」によれば、三島は昭和三十五年六月二十六日にはじめて浅草の「新世界」を訪れ、その晩から「百万円煎餅」を書き出したという。

(6) 『明治・大正・昭和・平成 物価の文化史事典』(森永卓郎監修、甲賀忠一・制作部委員会編、展望社、平成二十年七月)

(7) 加納実紀代『戦後史とジェンダー』(インパクト出版会、平成十七年八月)

(8) (7)に同じ。なお、主婦の内職と利殖の記事について加納が調査しているのは『主婦の友』のみである。その他の雑誌における同様の記事の主なものについて論者が調べたところ、主婦の内職に関しては『婦人公論』(昭和二十八年十一月)にルポタージュ「内職地帯をゆく」(阿部光代)、『世界』(昭和二十九年二月)に大原富枝による「内職する主婦たち」、『婦人公論』(昭和三十三年十二月)にグラビア「内職する人たち」などがあり、広く関心を集めていたことがわかる。主婦向けの利殖の記事では、当時話題となっていた投資家邱永漢による「私の株式投資必勝法」(『婦人公論』昭和三十五年七月十号)が連載されたほか、同誌の昭和三十五年十一月号では、

特集(実力女性時代)のなかで「手記 私の株式投資成功法」が紹介され、この頃に主婦の利殖熱が高まっていたことがわかる。利殖に関する記事は翌年も多くみられるが、野間宏「株に滅ぼされた女性たち」(『婦人公論』昭和三十六年十二月)などのように、主婦たちの安易なブームを懸念するものもみられた。

(9) 荻野美穂「『家族計画』への道 近代日本の生殖をめぐる政治」(岩波書店、平成二十年十月)

(10) 赤川学「セクシュアリティの歴史社会学」(勁草書房、平成十一年四月)。赤川はこのような言説は「三〇〇四〇年代の戦時期を挟みながら、二〇年代と四〇年代後半とでゆるやかに連続しながら存続する」とし、戦後においてより「量的拡大」をみせると指摘している。

(11) (9)に同じ。

(12) 松下圭一「大衆天皇制論」(『中央公論』昭和三十四年四月)

(13) (9)に同じ。

(14) (9)に同じ。荻野の調査によれば、『主婦の友』の昭和三十年三月号の座談会では、三井金属岡鉱業所の社宅の主婦たちを集め、主婦会で受胎調節運動を行なっていることが語られている。当時は多くの企業体で、従業員家庭を対象に避妊方法を指導する講習会が積極的に行なわれていた。それは近代的で合理的な家庭を目指す「新生活運動」という大義名分のもとになされたものだった。

(15) 山田昌弘「迷走する家族 戦後家族モデルの形成と解体」(有斐閣、平成十七年二月)

(16) 戦後には性に対する規制が大幅に緩和され、カストリ雑誌の氾濫など、性にまつわる言説が夥しく増えている。昭和二十一年に出版されたヴァン・デ・ヴェルデ「完全なる結婚」(原一平訳、阿蘇書房)は結婚生活における性を論じベストセラーになった。その他、アルフレッド・キンゼイのいわゆる「キンゼイ・レポート」(昭和二十三年、二十八年)、当時人気を集めた雑誌「夫婦生活」による性生活の手引きなど数多くの言説をみることが出来る。

(17) 『婦人公論』昭和三十年九月号では『性生活の知恵』の著者による性知識について特集記事が掲載されている。また、読者の投稿による性体験

の告白手記が掲載されたり、「セックスカウンセリング」という連載コーナーが展開されていく。

テキストは『決定版三島由紀夫全集十九』（新潮社、平成十四年六月）を使用した。

（なかもと さおり、広島大学大学院博士課程後期在学）